

キルケゴールと「規範」

須藤孝也

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

(和文要旨)

倫理と宗教を切り離しつつ、同時にまた両者を緊密な相互関係におくキルケゴール思想は、「規範」に対してポジティブに働くとともに、それを破棄するという両義的な性格を備えている。本論文は、キルケゴール思想にある規範論を、「存在論」、「形而上学」、「超越」といった諸概念を脱構築したポスト近代の規範論に照らして、現代において捉え直す。キルケゴール思想は、規範を普遍理性によって基礎付けることを不可能と見なすというポスト近代性を備えつつも、内在と超越の二項対立の枠組みにおいてしか規範を理解しなかったという点で、現代哲学の手前にいる。19世紀後半以降の諸批判を経て、正当化の言説としての規範論は、説得的に語られることが困難になった。しかし諸規範は、完結することなく更新され続ける認識の中で依然として作用し続けている。それを見届ける方法の一つは、現代の諸思想の声を聞く際に、それらに起点を与えたキルケゴール思想の低音を併せて聞くことによって、可能になるように思われる。

(SUMMARY)

Kierkegaard's thought, which not only divides ethics and religion but also puts the two into a close co-relationship, has an ambivalent character that both works positively with norm and at the same time discards it. This paper rethinks at the present day the norm theory in Kierkegaard's thought, by comparing it with post-modern theories on the norm that deconstructed the categories such as "ontology," "metaphysics" and "transcendence." Kierkegaard's thought has the quality of post-modernity that regards it impossible to ground the norm by the universal reason, but is located before contemporary philosophies as far as it understood the norm only in the context of dichotomy between immanence and transcendence. It has become difficult to talk about the norm as justified discourse persuasively, due to the criticisms after the later half of the 19th century. Yet norms function in recognitions that continue to be renewed without conclusion. When we listen to the voices of contemporary thoughts, the way we understand them seems to be possible,

only if we listen to Kierkegaard's droning thought, which provided them the starting point.

1. はじめに¹

「規範(norm)」は、法律や慣習にも具体化する、極めて広い浸透力を持つ概念であるが、本稿においては、倫理学および宗教哲学的問題関心から、これについて考察する。世界情勢の変化と連動して、現代の哲学・思想の領域においても、規範は様々に論じられながら、依然として重要な案件の一つとなっている。本稿では、現代の状況を照らし出すために、近代哲学と現代哲学のちょうど境目にあった思想家として、キルケゴールを取り上げる。現代においては、科学や経済など、社会のあ

¹ 文献略号：

Søren KIERKEGAARD;

巻数: *Søren Kierkegaards Samlede Værker*, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heigerg og H. O. Lange (København, Gyldendal, 1964).

Pap: *Søren ierkegaard Papier*, ung.l af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, 2. udg. ved Niels Thulstrup (København, Gyldendal, 1968 - 78).

Ludwig WITTGENSTEIN;

CV: *Culture and value: a selection from the posthumous remains*, ed. by Georg Henrik von Wright; in collaboration with Heikki Nyman; revised edition of the text by Alois Pichler; translated by Peter Winch (Oxford, Blackwell, 1998).

LE: "A Lecture on Ethics," in: *Philosophical Review*, 74 (1965).

LPE: 'Wittgenstein's Notes for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data",' in: *Philosophical Review*, 77 (1968).

PU: *Philosophische Untersuchungen*, hg. von Joachim Schulte in Zusammenarbeit mit Heikki Nyman, Eike von Savigny und Georg Henrik von Wright (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2001).

TLP: *Tractatus logico-philosophicus*, hg. von Wilhelm Vossenkuhl (Berlin, Akademie, 2001).

ÜG: *Über Gewißheit*, hg. von G.E.M. Anscombe und G.H. von Wright (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1997).

Michel FOUCAULT;

巻数: *Dits et écrits*, édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald; avec la collaboration de Jacques Lagrange (Paris, Gallimard, 2001).

- ・引用は巻数ないし略号と、ページ数ないし節番号を記す。
- ・〔 〕は引用者による捕捉である。

る特定の領域においては著しく世俗化が進行しているが、その他の領域においては、宗教は消滅するどころか、それをめぐる状況は複雑化しており、宗教をとりまく状況は新たな局面に突入している。私見によれば、このような状況の中で、「単独者 (den Enkelte)」や「逆説(Paradox)」としての信仰によって特徴づけられるキルケゴール思想を再考することは、単に19世紀の状況を復元するのみならず、現代の状況についての重層的理解をも可能にする。キルケゴール思想は、規範、すなわち社会的当為として、他者に対しいかなる要請をなすのか。本論文は、キルケゴールが示す宗教的規範を、その後の規範論の展開に照らして、再考しようとするものである。

2. 倫理の要請と座礁

「規範」に関してのみならず、あらゆる一般的な問題に関して、それとキルケゴール思想を交差させようとする場合、前提として押さえておかなければならないのは、キルケゴールは人間精神を発展するものとして捉えているという点である。キルケゴールは、俗に言う「成人」といった意味での「一般的な人間」といった等質的存在を想定せず、「人間」を、その者がそれに従って自らの人生を秩序づけるところの価値基準によって切り分け、それらを発展的に並べる。この発展段階は、微細に見れば、無数の分断線によって区切られるが、大きくは、美的実存、倫理的実存、宗教的実存の三つに分けられる。

人間は、それぞれの実存において、それぞれ独自の仕方で規範に関わる。第一段階である美的実存では、その後の倫理的実存や宗教的実存において主要な機能を果たす「永遠なもの(det Evige)」は未だ自覚されず、もっぱら「この世的なもの(det Verdslige)」や「時間的なもの(det Timelige)」に価値が置かれ、これらは規範を根拠付けるものとしても機能する。この世的なものに一切の価値をおく美的人間は、できる限り人生を享受することを目標に生きる。そこで認識される規範は、この世的なもの、および時間的なものによって正当化される。これに対しソクラテスの想起説がそうであるように、倫理的主体においては、自らのうちにこの世的な有用性に解消されない「永遠なもの」あるいは「超越的なもの」としての「善」が見出される。美的主体が様々な外的事象に価値や根拠を見出していたのに対し、倫理的主体は自己において永遠なもの、超越的真理を見出す。「真理は主体性である」(9,157)

といったテーゼは、こうした倫理的主体を特徴づけるものである。ただし、美的主体と倫理的主体は、キルケゴールの定義からすれば、利己的な主体と道徳的な主体に対応するわけではない。美的主体と倫理的主体を分けるのは、主体が個人的な利益を優先するか、社会的な利益を優先するかではなく、むしろそれが時間的なものを優先するのか、あるいは永遠なものを優先するのかである。美的主体は、必ずしも他者を無視する利己的な主体ではなく、この世的な有用性を生み出す限りで共同体的利益をも考慮しうる。

倫理的に実存する主体とは、永遠なものとしての真理を自らのうちに認め、これを自ら実践しようとする者を意味する。「当為能力(Skullen-Kunne)」(Pap. VIII-2B89,189)を備える倫理的主体にとって、自らのうちに見出された真理は、ただ単に認識される対象としての真理であるばかりではなく、むしろ実践するための真理である²。倫理的主体は、「である」という存在の次元ではなく、「であるべき」という当為の次元にあり、当為の対象である善は、世界に見出されるものではなく、主体自らがその意志によって要請するものである。「善は、私が意志することによって存在するものであり、そうでなかったら全然存在しない」(3,208)とも言われるように、倫理的主体は、その善を欲する意志、およびその善を実践しようとする意志によって特徴づけられる。キルケゴールが人間存在を、その自然的特徴によってではなく、発展する価値基準とその実践という二つの意味におけるあり方によって分類するために、「実存(Existents)」概念を用いた理由もここにある。実存の変容は必然的發展ではなく自由の運動であり、倫理的段階においてすでに、キルケゴール思想は普遍的に確保される規範から距離をとりはじめる。

しかしながらキルケゴールによれば、人間が自らのうちに見出した永遠なるものとしての善を、この世において実践しようとする倫理的主体の試みは、座礁することになる。「倫理的なものは、その無限の要求を伴って、あらゆる瞬間に存在している、しかし個人はそれを実現することができない」(9,223)。無限性のみならず有限性からも成る人間は、完全な無限性の要求に対応しきれない。時間的なこの世に、永遠なものを持ち込もうとする試みは失敗し、代わりに、時間的なこの世界の中に、

² cf. 「万人に認識(Erkjendelse)の能力がある。そして最も知識の豊富な者も、最も狭い知識しか持たない者も、誰でも、その認識において、彼がその生活においてあるところのものよりも、彼の生活が表すものよりも、遙かに進んでいる。けれども我々人間は、この不釣り合いにはあまりかかわらない。反対に我々は認識には大きな価値を置き、みなその認識をますます発展させようと努めている」(17,150)。

永遠なものを見出そうという宗教による解決が準備される。「倫理的なものをなすという事からの恐るべき離反、倫理的なものとの個人の異質性、倫理的なものからのこの留保は、人間における状態としては罪である。罪は宗教的実存に対する決定的表現である」(9,224)。人間の力によってのみ永遠なものの実現を企てていた倫理的主体は、自らの無力さないし傲慢さを自覚し、永遠なものへの関わりを、神を介して行うよう変化する。

3. 信仰と規範

倫理実存の後をうける宗教的実存は、宗教の形式において「永遠なもの」に関わる。宗教的主体の視点にさらに踏み込んで言えば、倫理実存をつき動かしていた「永遠なもの」はそもそも神によって与えられるものであったことが見出される。キルケゴールにおいて、キリスト教の信仰にその実現をみる宗教的実存に要求されるのは、新約聖書において説かれる神を介した隣人愛である。「愛することが義務であるという、この一見して明らかな矛盾を含んでいること、まさにこれによってキリスト教の愛は知られるのであり、それがその特長なのである」(12,29)と言われるように、聖書においては、隣人を愛することが義務として示される。キリスト教に根拠を持たない人間の愛が、その対象を恣意的に選択するのに対し、義務としての隣人愛の命令に従って生きる宗教的主体は、自らが関わる他者すべてを愛する。

倫理実存の選択が主体による自由の行為であったように、宗教的実存もまた自由の行為である³。すなわち、隣人を愛すべしという義務は、神と関係する一人の宗教的主体にとってのみ妥当し、他者において隣人愛の義務がいかにか果たされているかという問題は、宗教的主体が関与しうるものではない。「あなたはただ、自分が他人に対していかにあるか、あるいは他人のあなたに対する態度をいかに受け取っているかということだけに関心を払えばよい」(12,365)と言われるように、宗教的主体は直接的には神とのみ関係するのであり、他者との直接的関係は断截されている。しかしながらこれは、宗教的主体が他者関係を一切考慮しないことを意味するのでは決してない。宗教的主体は他者との直接的関係を放棄するが、なお神を介して間接的に他者に関わる。「先の聖書の聖なる言葉もまた、我々がお互いを裁くの

³ cf.「信仰とは認識ではなくて、自由の行為(Frihedens-Akt)であり、意志の表明(Villiens-Yttring)である」(6,76)。

に夢中になるようにけしかけるために語られているわけではない。そうではなく、それはむしろ単独者に、我が聴衆たるあなたに、そして私に向かって警告的に語られているのである。単独者が自分の愛を不毛のままに終わらせることなく、当の果実が他人によって知られようと知られまいと、とにかく愛がその果実によって知られよう、努めるのを励ますためにである」(12,19)といった記述に、神を介して宗教的主体がなす間接的な他者関係が見られる。

キルケゴールは、自らの著作活動について「私が自分の著作の仕事によって成し遂げたいと願ってきたこと、そして今もなおそうしたいと願っていることは、——私はそれを最も重要なことのなかの第一のことと考えるが、——キリスト者であるということはどういうことなのかということをはっきりとさせること、つまり、キリスト者というものの像を、その全き理想性の姿において、すなわち、その真実そのものの姿において、つまり、あらゆる点において真実極限にまで徹底化された姿において浮き彫りにして示し、この私が他の誰よりも真っ先に自ら進んでひれ伏して、この像によって審きの判決を受けることなのである」(Pap. X-5B107,288)と述べている。キリスト者の究極的なあり方を把握し、自らの実存をそれに近づけたいという欲求の充足は、個人的に行う自由の営みとしてなされ、前の隣人愛の教説が命ずるように、他者に対する直接的な関わりは厳密に控えられている。こうして一見すると、社会的当為は完全に個人の自由の次元へと解消されたように見えるが、しかしこれを規範論の文脈に据え置くと、宗教的実存は再びその効果を発揮しはじめる。「私は、私の仕事をキリスト者であることの理想性そのものを叙述するという仕方で、成し遂げるつもりである。これを成しうるためには、私は、またもや中立性を保持しなければならない。なぜなら、もしそうしなければ、私は結局は自分自身のことを語るということになってしまうからである」(Pap. X-5B107,299)といったキルケゴールの記述には、恣意的なキリスト教理解を提示することを避けようとする、他の信仰者に対する気遣いが窺えるが、しかし同時にここには、あるべきキリスト者の姿を他の信仰者に対して示す、との自己理解もまた読み取れる。

「キリスト者のあるべき姿」がどういうものであるかという問題は、当然、キルケゴール個人の問題ではなく、あらゆるキリスト者の問題であり、その著作活動において、キルケゴールは再び他者との関係に立ち入らざるをえなくなる。

生涯、私人として教会の外部にとどまったキルケゴールは、自らの立場を「権威なき」(17,51)ものと規定した。他者に対する強制を断念しながら、キルケゴールは自らの役割を確定するに至る。「一人の人間に何らかの意見、確信または信仰を強

いるようなことは、どんなことがあろうと、私にはできない。しかし他の人のためにただ一つのことだけは私にできる、彼に注意を押し付けることを」(18,101)といった記述にあるように、キルケゴールが採用するに至った自らの役割は、キリスト者のあるべき姿を示すことによって、できる限り他の信仰者の自覚を促すことであった。またその「キリスト者のあるべき姿」の内容は、単に内面の在り様にとどまるものではなく、「卑賤のキリストの倣い」という実践にまで及ぶ理想を極めたものであった。自らの思弁によって超越的なキリスト教の真理を認識することを断念しつつも、「この世におけるキリストの生が我々の模範である；私と全てのキリスト者は、我々の生がキリストのそれに似るように奮闘しなければならない」(16,108)と語るキルケゴールは、なお真理に対する「真の関係の仕方」であるキリスト教の実存を語り、自らに対してのみならず、キリスト者であろうとする他者に対してもこれを要請する。

4. 規範論の展開

(1) ウィトゲンシュタインの観点から

ウィトゲンシュタインの「語りえないものについては、沈黙しなければならない」(TLP 7)という言葉はあまりにも有名である。彼の思想は、前期の主著『哲学論考』において示された、こうした言語および論理の限界を確定する二元論的思考から出発する。この時期のウィトゲンシュタインの理解によれば、語りうるものと語りえないもの、事実と意義、科学と倫理、あるいは哲学と宗教の間には、媒介不可能な境界が存在する。内部と外部が明確に分かれるこの二元論においては、この世界で生じるいかなる事実も、それ自体は意義をもつものではない。もし意義というものがあるとしても、「世界の意義(Sinn)は、世界の外にあらねばならない」(TLP 6・41)。ウィトゲンシュタイン思想においては、倫理と宗教はともに意義に関わるものとして、論理の外部にあるものとされる⁴。こうした二元論は、内在と超越の間に質的差異をみるキルケゴール思想と同様のものである。この二元論に、「善悪間の差異はそもそもいかにして成立するのか？それは思考されるものか、すなわちそれは思考

⁴ cf. 「言い表せぬものが存在することは確かである。それは自らを示す(show)。それは神秘的なものである」(TLP 6・522)。cf. D.Z.Phillips, *Wittgenstein and Religion* (NY, St. Martin's Press, 1993).

にとって存在するものなのか？そうではない」(3,207)と述べるキルケゴールとの符合を見ることは難しくない⁵。

しかしながらこのような前期の二元論の図式は、後期のウィトゲンシュタインによって、『哲学探究』以後大きな改訂を施されることになる。論理学者として出発したウィトゲンシュタインは、伝統論理学が前提としていた同一律や矛盾律といったアプリアリに妥当するとされる原理について、それが実際の人々の生活の中で用いられる場面に注目することで、再考した。この考察は、論理に関する考え方の大きな転換をウィトゲンシュタインに促すことになる。「根拠づける」とはどういうことか。様々なルールに対し根拠づけがいかになされるかを考察するうち、無限に後退する根拠づけの作業を止めるものとしてウィトゲンシュタインが見出したのは、超越的な理念ではなく、むしろそれまで無意識に論理によって根拠づけられるものに数えていた具体的な実践であった。「私が根拠付け(Begründung)をし尽くしたならば、私は固い岩盤に達し、私の鋤は跳ね返される。このとき私はこう言いたくなる。『とにかく私はこうやっている』と」(PU 217)。実践を論理が根拠づけるのではなく、むしろ具体的な生活形式から様々な言語ゲームが形づくられるのである。

言葉は世界を映すものとする写像理論を採用していたように、前期のウィトゲンシュタインにおいて、世界とそれを記述する言語は存在論的に理解されていた⁶。しかし言葉は現実と一致することによって内容をもつと考えるこのような理解は、言語が実際に使用される仕方にそぐわないとして、後期の言語ゲーム理論においては批判される。同じ言葉が場面によって様々な意味をもちうるように、言葉の意味は決して状況を離れて不変の内容をもつのではない。こうして言語は確固たる内容を指示するとの理解は避けられ、後期の言語ゲーム理論においては、言語はその意味を各々の状況で果たす役割によって得る、と機能論的に理解される。こうした、あるものをそれが果たす役割によって理解する考え方は、後期ウィトゲンシュタイン思想のあらゆる面において用いられる。「何かが我々の人間生活の中で特定の役

⁵ 言語化の不可能性を主張しながらも、倫理や宗教といった論理の外部にあるものについて、ウィトゲンシュタインが、それらをないものとする、あるいはそれらについて思考することをやめるといったことはなく、それどころかむしろ、ウィトゲンシュタインの思考がそれらをめぐってなされたことは誤解されてはならない。cf. (LE,12)、鬼界彰夫訳『ウィトゲンシュタイン宗教哲学日記』、講談社、2005年。

⁶ cf. 「像の真偽は、像の意味と現実との一致ないし不一致に存する」(TLP 2・222)。

割(role)を果たすならば、我々はそれを言語ゲームと呼ぶ」(LPE,300)。言語ゲーム理論において、論理、言葉、ルールはその究極的根拠を剥奪され、もっぱらそれが実践において果たす役割によって利用されるものとして理解されるにとどまる。

後期ウィトゲンシュタインの理解によれば、ある判断を究極的に根拠づけるものの存在は否定される。確かに前期の二元論的思考においてもすでに、論理的な推論を行いながら究極的に正しいルールを示そうとする神学や形而上学としての哲学の不可能性は、洞察されていた。しかし二元論的な図式においては、根拠づけるものと根拠づけられるものとの間は分断されていたとはいえ、なお依然として、論理の外部に究極的に意義をもつものが実体的に想定されていた。しかし二元論的発想が解消される後期に至っては、究極的な正当性をもった唯一の生活形式および言語ゲームは認められない。「この根拠 [=我々が我々の物理学に対して持っている根拠] が説得力のあるものだと考えない人々に会ったとしよう。それはどのように想像できるか。物理学の代わりに彼らは神託を用いるのである（そのため我々は彼らが原始的だと考える）。彼らが神託にうかがいを立て、それにへと自らを向けるのは誤りか。——もしそれを『誤り』と呼ぶなら、我々は自分たちの言語ゲームから抜け出て、彼らの言語ゲームと戦っているのではないか」(ÜG 609)と言われるように、それぞれの言語ゲームの間に正当性の優劣はつけられない。このようにウィトゲンシュタイン思想には、超越的に根拠付けられる規範の不可能性、ないし相対化を見ることができるといえる。

(2) フーコーの観点から

主体の諸形式の歴史的変容を詳細にわたって跡づけたフーコーの仕事は、そのほぼ全てを規範論——もちろん、歴史的に構成された規範論を吟味し、構成し直すもの、という意味での規範論であるが——として読むことができるが、その分析は膨大であり、ここでそれを細かく跡づけることは到底できない。したがってここでは、キルケゴール規範論との比較が有用と思われる以下の二点のみを確認するにとどめる。すなわち、主体の歴史的構成性と普遍道德の終焉に関する議論である。

ウィトゲンシュタインが、個人という単位における意味の構成を超えて、生活形式を共有する制度ないし社会という単位において意味が構成されるメカニズムを考察したことは上に見たが⁷、さらにこれに歴史性を加えて考察するフーコーは、本

⁷ ウィトゲンシュタインが積極的に個人の単位について語るのは最晩年においてである。cf.「私

質主義的発想からは完全に自由であり、もはや「主体とは何か」とは問わない。フーコーの理解によれば、主体は歴史的状況の中で構成されるものであり、ア prioriに存在する「実体ではない」(2,1537)からである。フーコーは自らの関心の所在について述べている。「私が興味をもつのは、まさに、真理の諸ゲーム(jeux de vérité)との関係における、こうした様々な主体の形式の歴史的構成(constitution historique)なのです」(2,1538)。フーコーが立てた問いは、「主体とは何か」ではなく、「主体はどのようにして、ある限定された形式において、狂った主体ないしは健全な主体、非行者としての主体ないしは非行者ではない主体として自分自身を構成するのか」(2,1537)という問いであった。フーコーによれば、主体が構成されるということそれ自体が、自己意識の組織化ないし合理化にすぎない(2,1525)。手つかずの主体といったものは存在しない。主体は社会の中で構成される。自己の実践は自ら発明するようなものではなく、「個人が自らの文化の中に見出す図式(schéma)であり、文化や社会や社会集団が突きつけたり、持ちかけたり課したりする図式」(2,1538)である。

また、主体がこれまでいかに構成されてきたか、その諸様式を整理するために用いられる指標が、「権力」であり「真理」である。主体は「真理のゲームや権力の実践」(2,1537)を通して自らを構成する。主体が他の主体に関係するときに表れるのが権力であり、主体のイニシアチブを剥奪して、主体は権力の入れ物にすぎないとも言える⁸。例えば、キリスト教中世においては、主体は服従することによって「アイデンティティ(identité)」を獲得するが、このような形式の主体が構成されたのは、古代オリエントに範をとる「司牧権力(pouvoir pastoral)」に従うことによってであった。自らの内面を吟味し、罪を告白し、自己を放棄することによって、主体は構成され、救いを得る(2,1618)。また自らを認識の主体として構成することを可能にするのが真理である(2,1437)。フーコーによれば、真理とは真と偽を区別するものであるが、またこの真理によって、人は自分自身と他者とを統治することが可能となる(2,845)。「真理とは言説や知が自分自身と取り持つ一定の関係」(2,873)を指すにすぎず、真理は多様に構成されうるものであり、決して一つではない。フーコーにとって重要なのは、歴史上様々な仕方で見出された誤謬を超えて真理を見出すことで

は完全なる確実性をもって行動する。しかしこの確実性は私自身のものである」(ÜG 174)。

⁸ ちなみにフーコーの用語法においては、「権力は悪ではない」(2,1546)。これに対し、キルケゴールはその卑賤論において、おそらく他者に対し一切の権力を振るわない主体を狙っていたと思われる。また、フーコーにおいては、「自由は権力行使の条件として現れる」(2,1057)。

はなく、歴史において、いかなる形式の認識主体、認識対象が構築されたか、同定可能な規則の総体に関していかなる形式の集団的経験がなされたかということである。

今日に至るまで、自然や理性に基礎付けられた普遍的な真理を見出し、実践することが義務とされてきたのに対し、フーコーは、「すべての人々によって受け入れられるような形式の——全ての人々がそれに従うべきだという意味での——道徳の探究は、私には破滅的だと思われる」(2,1525)と言う。普遍的な真理、あるいは「本質的に主体を中心に据えた道徳経験は、もはや満足すべきものではない」(ibid.)。こうしてフーコーは、アイデンティティから自由な主体を構成しようとする。それは、「私たちが自分自身と持つべき関係は、アイデンティティの関係ではなく、差異化、創造、革新の関係であるべきです」(2,1558)と述べられるように、同一性を志向するものではなく、むしろ過去からの差異、現在における創造をなす主体である。自由を生み出す「問題化」(2,1416)としての思考の作業を通じて、「アイデンティティとしてだけではなく、創造的な力として自分たちを肯定」(2,1555)する主体を構築することが目指される。系譜学という歴史分析の方法論を駆使しながら展開されるフーコーの規範論もまた、ウィトゲンシュタインと同様、規範の構成性を指摘し、規範の形而上学性の解体を進め、これにより新たな規範との関係のあり方を推進する。

5. 考察

前節においては、現代哲学において注目すべき規範論を提示していると思われるウィトゲンシュタインとフーコーの思想を、規範論に関わる限りで概観した。以下、キルケゴールとこれら二人とを比較することによって、キルケゴール規範論を性格づけながら若干の考察をくわえ結びとしたい。

ウィトゲンシュタインとキルケゴールを比較するとき、そこに両者の符合を見出すことは容易である。前節においても、前期ウィトゲンシュタインの二元論と、キルケゴールの内在と超越の峻別の論理構成との類似を指摘したが、その他にも様々な仕方で類似点を挙げるができる⁹。例えば、フーコーと比較するとき、キルケ

⁹ グリーガンは、キルケゴールとウィトゲンシュタインの共通点として、以下の7点を挙げている：哲学の位置づけ、論争的な仕事、個人への語り、移行、間接的コミュニケーションの使

ゴールとウィトゲンシュタインが、ともに共時的な現在性の次元で考察を進める思想家であることが明確になる。さらに、キルケゴールの実存論とウィトゲンシュタインの言語ゲーム論の間には、類似が見られる。両者はともに、世界理解の類型を意味するものであった。しかしながら二人の間には遠さもまた存在する。キルケゴールにおいて実存の三分法が階層的に規定されているのに対し、言語ゲーム論はそうした価値付けとは無縁のものである。「高み」へと自らの実存を形成してゆくキルケゴールに対し、ウィトゲンシュタインは、「梯子によって到達できるようなものは、私の興味をひかない」(CV 10)と述べ、運動の垂直性を認めない。意味メカニズムの理解に関する相違は、彼らの差異性の理解において顕著である。ウィトゲンシュタインは内部性と外部性の間に意味の連関を認めない。これに対し、キルケゴールにおいては内在性と超越性は、その質的差異を強調されつつも、両者の間では依然として意味作用が確保されている。「私は信ずるということにおいて私自身を理解する(forstaa)ことができる」(15,26)とも言われるように、キルケゴールにおいて、超越の真理は、この世の生活において無意味であることは決してなく、弁証法的に何らかの意味を与え続ける。キルケゴールが個人を単位として現前する意味をめぐって思考したのに対し、ウィトゲンシュタインは制度ないし社会を単位にして、意味の連関するメカニズムを考察していたためである¹⁰。

フーコーとキルケゴールを比較する際も、両者の間には遠さと近さの両方を見ることが出来る。まず、決定的な遠さとして挙げられるのは、歴史認識という作業についての両者の理解の違いである。フーコーによれば、意味は確かに制度および社会を単位に構成されるのであるが、この構成の形式はさらにまた歴史の中で様々に変容する。現在の我々もまた、そうした歴史的に規定された意味連関に囚われており、少なくともこの規定性に無自覚である限りは、決してそれから自由となることはできない。フーコーは意味を解体するためではなく、むしろ現在において機能している意味を確定するために歴史分析を行う。これに対し、歴史認識とキリスト教の信仰を弁証法的に媒介した、ヘーゲル哲学との対決によって自らの宗教理解を形成したキルケゴールにとっての歴史問題は、歴史認識は信仰を基礎付けうるか否か、

用、パースペクティブという現象についての認識、説教する権威の拒否。cf. Charles L. Greegan, *Wittgenstein and Kierkegaard: religion, individuality, and philosophical method*, (London, Routledge, 1989), p.50.

¹⁰ cf. 「規則に従うとき、私は選択をするのではない。盲目的に規則に従っているのである」(PU 219)。

という問題であった。「個人の内に、そして本質的には神と関係する各個人の内のみ存在する善と悪の真の区別は、世界史的には結局無視せざるをえない」(9,129)と述べられるように、この可能性はキルケゴールによって生涯を通して否定される。このように、歴史認識の利用可能性についてのキルケゴールとフーコーの理解は全く異なっている。またこれと連動して、両者が模索する主体に関しても、その性格に大きな差異が認められる。キルケゴールの主体が、持続性ないし同一性を志向し、キリスト教の信仰によって不変の真理性を獲得する宗教的主体であるのに対し、フーコーの主体は、同一性よりも差異を志向し、歴史的・社会的な構成性を加味した未来へと開かれた美的かつ倫理的な主体である¹¹。このようにキリスト教の真理性をめぐる理解において、両者は大きく異なるが、しかし自己関係する主体というレベルにおいては、両者の関心は驚くほど近い。キルケゴールは、キリスト教信仰に立脚しながらも、「そこで、絶望が根こそぎにされた場合の自己の状態を表す定式は、こうである。自己自身に関係し、自己自身であろうと欲することにおいて、自己が、自己自身を措定した力のうちに、透明に根拠を置いている状態」(15,74)と述べ、自己関係する主体を強調したが、フーコーもまた、新たな形式の主体について「自己への関係」(2,1212)を不可欠のものとした¹²。

以上のように、キルケゴール思想には、同一性および内在性には回収されない、それとは質的に区別される、単独性および超越性を提示するというポスト近代性があり、同時に、意味の社会的および歴史的な構成性の認識に関する、プレ現代性もまた見られる¹³。しかしながらこの両義性の中には、時代的制約とともに、20世紀の思想史がそのままにしておいた問題についての考察があることも見出されねばならない。それは「意味の受けとり」という問題である¹⁴。これは、意味の構成

¹¹ もちろん、これはキルケゴール的意味における美的・倫理的主体とは同一ではない。それはキルケゴール的三分法を経た後に、再度構成しなおされた意味における美的・倫理的主体である。いずれにせよ、何らかの形式の主体を実体として考えることは避けられねばならない。

¹² cf. William McDonald, "Writing as a technology of the self in Kierkegaard and Foucault," in: *Enrahonar*, 25, published by the Autonomous University of Barcelona, 1996. Thomas Flynn, "Foucault as Parrhesiast: His Last Course at the Collège de France", in: *The Final Foucault*, ed. by James Bernauer and David Rasmussen (Cambridge, MIT Press, 1988).

¹³ マトウスティクは、キルケゴールに普遍倫理批判を読んでいる。cf. Martin J. Matustik, "Kierkegaard's Radical Existential Praxis, or Why the Individual Defies Liberal, Communitarian, and Postmodern Categories," in: *Kierkegaard in Post/Modernity*, ed. by Martin J. Matustik and Merold Westphal (Bloomington, Indiana UP, 1995).

¹⁴ 「受け取り直し」という意味を含みもつキルケゴールの「反復(Gjentagelse)」概念は、単に

性という問題と無関係ではないが、しかしそれと同一の問題ではない。キルケゴールが構成した意味のある部分は、現代という状況においては、多かれ少なかれ修正を加えられる。しかしながら、意味の受け取りの問題は、キルケゴール以降もほとんど新たな展開を見せていない。現代哲学は、意味は現前せず、たえず解釈にさらされるという状況を執拗に反省したが、この反省は、状況において構成された意味の主体による受け取りという作業の重要性を、さらに一層増すように思われる。普遍的規範の根拠喪失による相対化が、しばしば規範そのものの廃棄へと流れる傾向があり、このことが規範をめぐる現代の問題の一つであるならば、その解決は、規範の構成性の解明ではなく、むしろ主体が規範と取り結ぶ関係において探られねばならないだろう。その際、20世紀の構成論の成果を加味しつつ参照し直すならば、意味ないし規範の合理的根拠付けを手放しながらも、それとの関係を把持しうる論理を見出したキルケゴールの思想は、規範との新たな関係の結び方を示しうると思われる。

キーワード：

超越性、外部性、基礎付け、意味の構成、主体

KEYWORDS:

transcendency, externality, ground, constitution of the meaning, subject

ある出来事が繰り返し生起することを意味するものではない。宗教的実存においては、美的実存および倫理的実存もまた受け取り直される。cf. (5,115).